
素月の理法

Z.K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素月の理法

【Nコード】

N2836D

【作者名】

Z・K

【あらすじ】

酔いのうちなる“僕”は便所の窓より望む月に想像的な活力を得るが、ゲンジツから乖離した「躁」が滑落を誘起するマヤカシではないことにはすぐさま気が付かされるのであった。

胆汁まじりのとろとろした温かい嘔吐物が顎を伝い落ち、喉頸をくすぐる。――目覚めてはいないが決して眠っているのでもない半醒半睡。――指先ひとつ動かすことのできぬ全不如意の状態にあって、ぴりぴりした胃液の噴流を嫌厭の欠片もなく受容してしまっている自分。――薄くまぶたが開かれているにもかかわらず何ものも明視することのできぬ虚ろな、役立たずの眼球。静かに、間歇的に、生体の仕組みに従って、水菜の臭いのする酸っぱい粥状の液を口腔に溢れさせていた。今の僕にはそのことがよくわからない。

ある瞬間、舌の根もとがぐっと口蓋へ押し付けられ、それを合図に内臓がびく、びく、と痙攣する。――跳ね、零れ、垂れ、流れる。粘膜を焼くウィスキーまじりの反吐は超現実的な弛緩の感覚を歪に励ますばかりだ……

しかし、頬肉と歯茎の間に溜まった繊維質の滓を舌先でこそぎ落としながら、酔いのうちなる僕は、五感に巻きつく荒あらしい羈絆を逃避的に知覚し、その不吉な感じを手がかりに、胃壁が内部に引っ張り込まれるような例の苦痛からもう決して逃れられないことを、少しずつあきらめていつてはいたのだ。状況は悪い。いやに薄暗いここが、今だ。僕は座っていた。どうしたとか、――どうしたことだろう？ 下半身が丸出しではないか。厚ぼったく腫れた赤い下唇から萎びた性器へと連なる薄茶色にテラつく吐瀉の痕は、泥流のごとくこつてりと盛り上がっている。重みのある未消化のそれらといっしょに出てきたいろいろの汁はじっとりワイシャツに染み込んでいる、早くもみじめに冷えはじめていた。僕の座っているのは椅子ではなく、洋式の便器だ。日常領域の細部が物質の硬い輪郭を帯び、僕を羞恥の入り混じった憂鬱の深みに押し込めようとしている。

——なんだ、なんて、嫌な、酷い……。ここは電灯の消えた便所の個室である。どうやら排泄の途中で心神喪失したのらしい。自然と瞳孔が開いていく。うまく焦点を定められない。

擦り硝子の引き窓に淡く夜光が滲んでいた。便座に腰を下ろしたまま、窓へと震える手を伸ばす。指先の触れるまでの距離は腕の長さにはほぼ等しかった。鍵はかかっている。中指の第一関節を縁に引っ掛けて——ぞろろ、と貧しい音を立てながら——、どうにか概ね三十センチほど開くと、冷ややかな秋宵の粒子がなだれ、汗玉の浮かぶ鼻先にふわりとたわむれた。月と星ぼしの光が増す。——素月よ、名残の月よ、なぜだろう、じっと僕を見つめている。

僕は月面に立っていた。悠久なるものに融けていた。現実には《こちら側》と表現しなければならぬ方へ目を細めれば、淡黄色のモルタル外壁に穿たれた小窓に青年の顔が寂しく覗いている。それは窓枠に切り取られた晒し首のようでもあった。窓外の夜空を凝然として見上げる、青白く不健康にむくんだ moon face の彼はまことに憂わしげで、ナンダカトモサミシソウダツタ。

僕は阿呆みたい——実際、阿呆同然に酔っ払ってしまったているのだ——ぼかんと口を半開きにしたまま、狭く矩形に限られた青黒い空に魅せられていた。ふと思う、——このまま耳をすませていれば《りりん》とコオロギの鳴き声が聞こえてくるだろうか。ああ、もう秋だもの、ぜひとも鳴いてくれ……。真面目に焦がれたのだが、どんなに注意力——アルコールにやられた頭でどれだけの注意力を発揮できるのかはわからないが——を漂わせんとても、静寂を打ち破る回復の合図は毫も歌われない。沈黙めいた居心地の悪い静けさが、むかむかする反吐の臭いといりまじって狭苦しい便所に充満していった。わがままな念じの糸がぷつんと切れる。が、落胆はない。力みが失せ、むしろ微笑を禁じえない。僕はぐらぐら上体を揺り動

かしながら、敬虔なる者が目をつむってカミサマに祈るように、胸をいくらかどきまぎさせて、そのまましばらく、ただじっと待機しているだけだった。そう……僕は《だけだった》が、きつとあきらめてなどいないのだ。おとなしく、そうあれかし、と願いつづけている。望みの叶えられないだろうことが、すぐさま望みを打ち捨てる理由になるだろうか？ 望むことの経験が齎す新しい感情の意味を知っているような気がしてならないのだ。望み、想い、亢進する。そこには人間的な根拠があるはずだ。コオロギの鳴き声を想像したこと、想像し続けることは、実際にコオロギが鳴くか鳴かぬかの結果から独立した感懐を生ぜしめるものだろう。美の蓄えを未来へ、想像的にむすぶのだ。その試みは、試みたことでほとんど完結しているともいえよう。だからこそ、執着の念は沸き起こらない。寛容と微笑が棚引くのみである。その慎み深い対応は、人間的諸要素の普遍的な部分を善く敷衍する、無垢なる求めの雛形なのだ。僕は自分の欲しているものが詩や虹の類であることをわかつている。また、それらが表象としてありうることに満足している。現にあるのではなく、ただありうるということ、そのあきらめなにかぎり延々とつづく過程において、独特の力が働くことを、きつと理解しているのだ。臨床的な証左として、僕は悠久なるものの不作為——コオロギは決して鳴かない——にひさがれることなく、むしろ甘やかに純化されているのである。僕は自分がプツと吹き出したのにおどろいた。想像力が暴れ、思考は徒に加速する。制御不能の奔流を感じた。……

月を、星を、さらに遠くの見きわめ難い銀河を媒介に、——翻って、僕らの内奥へ融けていった、遠い昔に捨象された、美しくも涙ぐましい思い出の数々を見つけ出し、何とも知れぬ行く末へと投げかける。記憶の火花はまだ見ぬ明日の黒ぐろとした不確かさにかき消されてしまうのだが、それでも僕は辛抱強く投げつづける。そうしなかったならば、生きていくのは苦しいばかりだから。そうだろう？

核の——

《――核の脅威にさらされぬことのない現代に真つ当な想像力を働かせるのであれば〈全体としての人生〉を祝福することなどできない。『核の傘』の下で黒い雨に怯えながら、体制側の代弁者＝似非知識人の甘ったるい虚言を進んで受け入れ、騙されたフリをし、それら欺瞞の全体を「政治的リアリズム」として受容してしまうことは、自分自身を含めた生きとし生けるものすべての歴史を裏切ることには他ならない。無意識の羊は自身をその範囲に含み込んだあらゆる死の危険性に無関心である。耳をすますべきだ。そうあってはならない、と叫ぶ人がいるではないか。彼らが殺されたとき、彼らの言葉を思い出せるように、耳をすまさねばならない。今を今のようにしなないための道徳的主張のあったことを記憶し、いつの日か自分の声で叫ぶことができるように――》

僕の仕事は、思い出すこと、覚えること。麻痺させることなく、痛みを痛く感じさせること。イエス、わかっている、絶対に酔っている。

――そうだ！ オマエ！ボクはゲロまみれだ！ このヨツパライめが！ いきなし核問題なんぞ持ち出してきやがって、そんなもんふりかざしてナニサマのつもりかね？ えらぶってみせたところでオマエ！ボクの無恥がオマエ！ボクに向かって赤裸けになるだけだぜ、ハ、ハ、ハ、この豚畜生めが！

酩酊の躁がずるりと滑落する。俯き、腰をがっんと無理やり引いて、便器の底に向かって――ふぐっ！ げえげえげほげほ、嘔吐した。温かい酸性の懸濁液が性器をかすめ、ぬめらせる。粒だった橙色の膠化体が飛沫のように散って、いやらしく糸を引きながら陰毛に絡んだ。嘔吐物は鼻の穴からも盛大に流れ出ているのらしかった。ぎゅっと思い切り目をつむると、眦からヤニまじりの涙がねっとり

垂れた。

どん底へと転げ落ちる……

言葉を知らない人間の発するような音、善いものと悪いもの、精粗ひっくりめたこの世のありとある事物を呪うような、呻きとしての音。重たくうねる、いかにも器官的な痛みが胃のあたりにぐねぐね集まっていく。苦痛を横切ったのでない付随的な肉体反応の一切が霞んでいった。――

大量のトイレットペーパーを消費して、どうにか身なりを整えた。反吐にまみれたシャツは結局脱ぐしか手はなかった。下着とジーンズに被害が及んでいなかったのは幸いといえよう。どうということはない、泥酔状態の僕は座ったとたん気を失い、気を失った状態で吐いていた、それだけのことである。今、午前四時を回ろうとしている。

汚れたシャツを裏返しにして丸め込み、袖を絡めて軽く結ぶ。窓を全開に開けた。身を乗り出すと、一陣のつむじ風が吹き騒いでバサバサと頭髮を乱しにかかった。おおよそ四、五階の高さである。眼下は駐輪場のようだった。白線で四列に区切られていて、二列目と四列目の真ん中に錆だらけの外灯が立っている。動くものはない。置き去りにされたカゴ付き自転車がまばらに点在しているのみだった。僕は白いシャツ球を掴んだ手をまっすぐ、出来るだけ遠くにまで伸ばし、すぐにも強まっていくだろう躊躇いを予感してやおら弾くように五指を開いた。球は地面に吸い寄せられるように、やわらかく落下していく。――変化が起きた。球がもろもろとうごめき、ほぐれ、落下傘が開く具合にバツと瞬時にして「上半身」の形を取り戻した。高所から突き落とされたニンゲンのように両袖を僕に向

かって突き上げ、微風にその軌跡をゆらめかせながら地に達した。
濃灰色のアスファルトに茶色い汚れをさらけ出したのだった。僕は
自分の皮膚が石のようにざらつき、硬くなっていくのを不快に感じ
取っていた。

了（平成19年8月）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2836d/>

素月の理法

2011年1月9日02時12分発行